

翼の下

中尾 静 夏

「大きくなったら……おれは……」

赤く染まる空を見ながら、時也は言った。

「おれ……この『セカイ』を変えてみたい……!」

「……うん!」

何の疑問も持たなかった、あの頃みたいに。

僕はただ、信じるだけで良かったのかもしれない。

「お前あった?」「いやー無いわ」「あ、あった!」

その日はテストの順位発表で、掲示板の前は混雑していた。

「なあ、一位の坂口って誰?」



「あーアレだ、いっつも保健室にいる……」

「おい、アレ……」

男子生徒の視線を感じた。

「何アレ……ヘッドフォン？」

「なんでも声を聴きたくないからしてるらしいぜ？」

「はぁ？なにそれ馬鹿じゃねえの？」

何とでも言え。

声は聞こえない。しかし、表情や口の動きで何を言っているかは想像がつく。それでも実際に聞くよりはずつとマシだ。

『コイツ』が僕を守ってくれている限り、僕に怖いものなんてない。

高校を出て駅まで十分。家まで電車で三十分かかる。もう慣れた道を通って、一人暮らしているアパートに戻る。

ドアを開ければ暗い部屋に出迎えられる。電気なんてほとんどつけない。カーテンを開ければそれなりに光が入るし、暗くなれば寝るだけだ。

テレビ、ラジオ、ケータイ、新聞——情報が入るものは何も持っていない。街を歩いていれば何が起こっているかぐらい街頭テレビでわかるし、別に興味などない。

はつきり言って聞きたくないし、知りたくもない。

ヘッドフォンを外し、机に置く。その脇に置いてある固定電話を手に取り電話をかける。

RRRRR……RRRRR……

『ただ今電話に出られません。御用の方はピーと鳴った後——』

「……今、帰りました」

脈が速くなる。気にするな、いつも通りにするんだ……。

「今日、テストの順位が発表されて一位でした。唯一英語で失点があったので、次は落とさないように気をつけます……」

受話器を握りしめる手が汗で気持ち悪い。運動したわけでもないのに息が苦しい。

——もう駄目だ。

「……失礼します」

音がしないようにゆっくりと受話器を置いた。そしてすぐにヘッドフォンをつけ、その場にしゃがみ込む。

「はぁ……はぁ……っ……」

気にするな。想像するな。何も……何も。

ギュッと目をつぶる。

何も……思い出すな。

高校には全国的に有名な進学校に入学した。入りたくて入ったわけじゃない。ここに入らなければいけないと母にずっと言われていたためだ。

小さい頃から変なプレッシャーがのしかかっていた。あの学校に入りなさい、あんな仕事に就きなさいと。

そして中学受験の時——僕は失敗した。

母は今まで以上に厳しくなった。自由な時間なんて一秒もなかった。部活だってやっていない。休み時間も勉強していた。当然友達なんてできるわけがない。いつも一人だったが、いじめられなかっただけマシだったかもしれない。

合格したあの日は初めてといてもいい、母の笑った顔を見た。だが僕は笑うなんてできない。そして僕は一つ条件を出した。



ゆっくりと目を開け、床にゴロンと寝ころぶ。何もひいていないフローリングの床は冷たくて気持ちがいい。
「……」

今日はもう、このまま寝よう。

「おつかれー」「おつかれーすー!」

「はぁーキッツイ!」

体操着の襟をパタパタさせながらグラウンドに倒れこむ。

「おい時也ぁ! 片付け手伝えよ!」

「あーごめんごめん。今行く!」

すぐに立ち上がり転がっているボールを拾い始める。片付けは一年が中心だが、他より部員の少ないサッカー部は二年もやらないと大変なくらいだ。そこまで散らかすのも悪いのだが。

最後のボールを手にとって、何を思ったか太陽と重ねてみた。

「何してんの?」

「ん? いやー……」

同級生に聞かれ、少し恥ずかしいが言ってみた。

「……小学校の頃さ、俺『大きくなったらこの世界を変える!』って……ちょっと夢持ってたさ」

「はぁ? 世界変える? バカなお前」

「わかってるよそんな事! わかってるけどさー……」

——居たんだよなぁ……ここに。一緒にやろうって言ってくれる奴が。

「信じてくれる奴が居たんだ」

それを聞いた同級生は、

「……信じてやろうか？　なんか可哀想になってきた」
「なんだよそれ！　いいよ別に！」

高校は家からわりと近い普通の公立高校に進学した。小さい頃からサッカーが好きで、中・高ともにサッカー部に入部した。毎日楽しくて充実していたが、一つ欠けている事があった。

「あいつ……元気かなあ……」

あの夢を笑わないで、応援してくれた奴がここにいない。

「ただいまー」

「おかえり兄ちゃん！　ゲームやってー」

「えー疲れたよ俺ー」

そう言うものの顔は笑っている。年の離れた弟は小さくコロコロしていて可愛い。

「あ、お帰り時也」

「ただいま母さん。……ねえ、母さん」

「なあに？」

「ムオって居たじゃん？　ムオ」

「ああ、坂口君の事？　坂口君がどうしたの？」

「いや……どうしてるかなって」

「そんな事母さんが知ってるわけじゃないでしょう」

「ですよー、あはは……」

頭をかきながら二階の自分の部屋に戻る。

小学校の頃は良かった。良かったんだあの頃は。



中学に入ってからムオは変わった。一言も喋らなくなって笑いもしない。人を寄せつけないオーラがあった。何度も話しかけようとしたが、ムオは聞く耳を持っていないようだった。

溝ができたのはその頃だろうか。

「……はー」

椅子に座って大きく息を吐きながら、背もたれに思いっきり寄りかかって天井を仰ぐ。

なんで今思い出すんだろう…。

「ムオ……大丈夫かー」

何がだよ。俺は一体何を心配しているんだよ。

そう思いながらも独り言は続く。

「ムオ……笑ってるかよ……」

「坂口君、ヘッドフォン外してみようよ」

「……」

保健室の木下先生が指でヘッドフォンを示す。

僕は何も言わない。

ふう……と先生はため息をついた。別に相手にしてほしくない。できればほっといてほしい。

教室の代わりに保健室が開いている教室を利用して勉強している。人に会うのを極力避けるためだ。勉強はできるので他の先生は何も言わない。

だが、この先生はしつこい。

「坂口君、こんなんじゃ学校楽しいかな？ もっと皆の輪に入ってみようよ。きっと楽しいよー」

正直何を言っているかは聞こえていない。だから気兼ねなく勉強に集中できる。先生だってそのうち諦めてどこかへ行ってしまふのだ。

黙々と勉強を続けるムオを見て、木下は思った。

——変かなあ、進学校の生徒にこんな事思うのは……。

「……勉強ばかりじゃ、意味ないぞー……」

帰りは雨が降った。その影響で電車が遅れ、降りた時はいつもより一時間も遅かった。鞆から折り畳み傘を取り出し、歩き始めた時だった。

「——！」

見覚えのある少年が前を歩いていった。周りをきよろきよろしながら駅から離れていく。

なんで……いるんだ、時也……。

ここは地元ではない。高校は家から通うとかなり時間がかかる。だから近くにアパートを借りて生活しているのだ。そんな時也には関係のない土地に、なんている。

動揺している。親に電話する時とは違う緊張感があった。絶対にばれるわけにはいかない。ここで時也と会っても何も話す事はできない。

傘で顔を隠すようにして歩いた。しかし、どんなに歩いても時也の姿が消えない。嫌な予感があった。

そして案の条、時也はなんと僕のアパートの前で足を止めた。
なんで……。

「……」



ここに住んでんのか……ムオ……。

昨日ムオの親に書いてもらった地図をジャージのポケットにしまい、階段を上る。部屋は確か二〇四号室だ。

「いるかな、ムオ……」

古いピンポンを鳴らしてみるが出てくる気配はない。そりやそうだよな、いきなり来て。諦めて階段を下り、来た道を引き返そう——その時だった。

「……ムオ？」

階段の下——そこに、ムオはいた。

なんで来たんだ……。

「久し振りだな、ムオ！」

良かった……会えた！

「ムオ……どうした？ やっぱいきなり来て迷惑だったか？」

心配しているような時也の表情に異常な怒りが込み上げてきた。——なんで！

バシッ！

「っ！ なんて……」

気が付けば時也の肩を殴っていた。そして時也の体がよろけたと同時に、階段を駆け上がった。

「！ ムオ！」

時也の声が大きく、うっすらと聞こえた。

バン！ と凄い勢いでドアを閉め、鍵をかける。

「はあ……はあ……」

ドアを背にして呼吸を整えた。ゆっくり息を吸い、吐く。次第に落ち着きを取り戻した。

「……」

唇をかみしめ、拳を握る。

時也を殴った感覚がまだ残っていた。

ザアアア……………。

殴られた時、とっさに傘を離してしまい雨に打たれた。だが、いつまでたってもそこを離れる事ができない。傘を取る事さえも。

「……ムオ……………」

何があったんだ……………本当に。

中学受験にあいつが失敗したのは知っている。それをまだあいつは引きずっているのか？ それとも他に何かあるのか。もっとも、自分の考える範囲の中に答があるとは思えない。

とにかく今日はもう帰ろう——そうやって思えたのは、あれから二十分は経った頃だった。

「坂口君……………具合悪いの？ 顔色がよくないようだけど……………」

どうせ聞こえてはいないのだが、言わないと落ち着かないので一応木下は言った。

保健室に入ってきた時からずっと俯いており（目を合わせないのはいつもの事だが）、明らかに昨日とは違うオーラが漂っていた。カラーなら真っ黒だ。

「えーと……………なんかあったら言ってるね？ 坂口君……………」

そう言って木下は机のパソコンに向かった。

——どうして来たんだ……………時也。



いつもならずぐにノートを広げるのだが、正直勉強する気になれない。そのまま机に突っ伏す。

時也には正直会いたくなかった。中学受験に失敗した時から時也とは喋っていない。もう五年は経っている。自ら時也を避け、関わりないようにしてきた。

時也と自分を繋いでいたのは『夢』だった。小二の時に突然時也が言い出したのだ。本当に唐突で驚いたが、気付いた時には頷いていた。

そういう、自由な夢を持つ事——それが自分には与えられなかった。いつも母は自分にいい学校、いい会社に入る事を要求してきた。

なんでこんなに違う。僕と時也は何が違う。羨ましくてしょうがなかった。だから頷いたのかもしれない。母から逃れたいとずっと思っていたのかもしれない。

高校受験はそれにはいい機会だった。受けると言われたこの高校に通えば実家にいなくて済む。アパートを借りようと言い出したのは母の方だ。

そして条件として出したのも、母には別に酷なものではなかったようだ。

『一切連絡しないでほしい——状況は伝えるから。僕はあの高校へ行く。だからそれでいいだろ?』

『?』

『あの高校に行けばそれでいいんでしょ?』

その時の母の顔は覚えていない。

そんな母だったが、父はそこまで教育熱心ではなかった。某大学の准教授である父は研究室に泊まり込んでいる事が多く、ろくに顔も覚えていない。会話した回数も数えるほどしかないどころか何を話したかもわからない。それほどに存在は薄かったが、ただ一言だけ忘れられない言葉があった。

『子供の夢は大人が入り込んでいい場所じゃない』

小さい頃、夜遅くに父と母が喧嘩している時に父が言った言葉だった。ヒステリックになっている母とは打って変わって、父は冷静だった。

放任、無関心——父がそうだったとは思えないが、その父の言葉は心底ありがたかった。それでいい、そうしてくればどんなにありがたい事か。でもそれを普段家を仕切っている母が許さない。

——でも……でもさ。

母さん、そんな事を言わなければ父さんはそんな態度しないよ。

父さんも、父さんがそんな態度じゃ母さんはいつまで経っても理解してくれないよ。

もういい。もうやめて。僕の事で喧嘩しないで。

言われた通りに進むから。言われた通りに生きるから。

どうせ叶わない夢なんて、持たないから……。

「坂口……君？」

後ろに異変を感じ振り向いてみると、かすかに、でも確かに。坂口が鼻をすすっている音が聞こえた。

「……………」

悩んでいるの……？ 苦しいの？

もともととおせっかいな木下は色々な想像をするが、坂口はとにかく何も話さないで全くわからない。

「……………」

泣きながら寝ている。顔を覗き込むと目の下にクマがあった。

……話してよ……そんなに私は頼りない？

情けない。私は何のためにここにいるの。



木下は坂口に毛布を掛けてやる事しかできなかった。

なんで俺は今更あの夢を思い出したのかな。

教室の自分の机に突っ伏し、時也は考えていた。昨日思い出すまで正直あの夢の事は忘れていたのだ。ムオとだんだん関わらなくなって、それとともに夢もどこかに消えた。今更思い出しても意味がないのに、どうして……。

「……………あぁ……………」

駄目だ、わからん。体を起こし、思いっきり伸びをする。頬杖をついて窓から空を眺めた。昨日の雨が嘘のように気持ちいい晴天だ。

その空の中を数羽の鳥が舞う。あぁ、気持ちよさそうだな……ふとそんな事を思った。

そうだ、そういう——そういう自由な感じが俺は欲しいんだ。何にも縛られない、自由な感じ。

あの夢を二人で追いかけていた頃みたいな。

「……………あぁ……………」

あの頃の記憶が鮮明に蘇る。放課後に図書室にこもって二人で本を読み漁った。何からやれば叶うのかなんてわからない。だからこそとにかく読んだ。

そして楽しかった。思えばあの頃が一番楽しかったのかもしれない。

大人の入ってこない自分達だけの世界が広がって。

あの頃の感覚がまだ残っている。もう一度あの頃の感覚を味わえと体が叫んでいる気がした。

「……………っし」

自分の答なんて決まっている。問題はムオだ。

あいつはあの頃の事をどう思っているのか、今となっては全くわからない。

「……」

少し考えて時也は席を立った。

「あ、時也もう帰んの？ どっか寄ってかね？」

「ごめん、急用ができたから」

足早に学校を出て、まっすぐムオのアパートへ向かった。

最初は気付かなかったが、ムオはヘッドフォンをしていた。それを外さず殴ってきたという事は、ムオには話を聞く気がないのだろう。それならそれでいい。

言うだけ言って帰ろう。それで届くかどうかはあいつ次第だ。

父は教師、母は看護師だった。両親のそれぞれの分野をうまく頂戴し、木下は『学校の保健室の先生』となった。

若くてノリもよくすぐ生徒に好かれ、どこかが悪いとかでもなく保健室に生徒が出入りするようになった。そのたびに坂口は居心地が悪いのかどこかへ行ってしまうが。

おせっかいだとは自覚している。しているが、自制が利くほど大人でもなかった。

「来ちゃった……」

それは、古い木造アパート——坂口の家だ。

来たはいいがその次の勇気がでない。坂口が学校を出たのは確認済みなのでここにいるという事はわかっているのだが、わかっているからこそ足が出ない。

情けない……本当に情けない。私は何のためにここまで来たの。必死に自分を奮い立たせる。

そうこうしているうちに、こちらに向かって来る少年に気が付いた。制服でどこの高校かもすぐにわかった。

「ねえ」



気付いた時にはもう声をかけていた。ああ、こういう行動力だけはあるんだなあ……。案の条少年は驚いて固まっている。ここで退いたら負けだ、とよく意味のわからない言葉で勇気を振り絞る。

「君、ここに住んでるの？」

「え？ あ……いや、友達が」

「友達!? もしかして坂口君? 坂口ムオ君？」

「え!？」

声と表情からしてビンゴだ。そうとわかれば。

「お願い! 助けて!」

「はぁあ!？」

「あ……」

失敗した……。

「……あ、先生なんですか」

再三の説明でどうにか納得してくれたらしく、少年の警戒心は解けたようだ。ふう、と胸をなでおろす。

「そ……そう。ごめんね」

「いや、いいですけど……でも先生、話す時は黙って下さい」

「え!? な、なんで？」

「ムオは大人が嫌いですから」

これは小学校の頃にムオが言っていたので間違いはないだろう。丁度夢を追っていた頃だ。

「そっか……」

がっかりした様子を見て申し訳ないなと思ったが一度出た言葉は戻らない。少し直球過ぎたかと反省する。

しかし、

「でも、まあいいや。じゃあ頑張って！」

「はぁ……」

この人は悩みなんてないんだろうな……。

階段を二人で上がって、ピンポンを押した。

——だからなんで来るんだよ！

訪問にイラついたムオは思わず足元にあったゴミ箱を蹴とばした。カランカランと空しい音が響く。

ドンドン。

「ムオー」

家にいる時はヘッドフォンを外している事が多いので、薄いドアの向こうの時也の声が丸聞こえだった。あわてて装着し、ドアを背にして座り込んだ。静寂がムオを包み込む。

——静かだ……いつもと変わらない。もうこのまま寝てしまおうと思ったが。

ドンドンドンドン。

「ムオ！」

ドアをたたく音と時也の声が大きくなり、かすかだが耳に届いた。

——うるさいな……。

「ムオ！ 俺さあ、ちょっと思い出した事があったさ！」

いきなりなんなんだ。膝の中に顔を埋める。

「昔の！ 夢の話！」

「……………」



ムオは思った。今更なんでその話なんだ。終わったんじゃないのか。

「正直今まで忘れてた！でもなんか突然思い出して……聞く気ないならいい！言うだけ言って帰るから！」

それは意味があるのか。わざわざ僕に言う意味は。

部屋からは何の音もしない。時也は一人語り出した。

「俺さ、馬鹿だから。『世界変える』つつつても全然わかんなくてさ。お前を巻き込んで色々調べたんだよな、お前頭良いから。でも結局図書室の本あらかた読んだところでわかったんだよな。『あぁ、やっぱり駄目なんだ』って。答なんて載ってなかった。それが答だよな。『世界を変えるなんてできない』って」

「……」

「でもそんなになるまで夢中になって調べてたのは、ただ単純に楽しかったんだよな。大人の踏み込んでこない俺達だけの世界だったから」

俺達だけの——そうだよ、そこには僕等しかいなかった。

でも答を見つけた時点で大人が入り込んできた事と同じだった。

時也が続けた。

「俺さぁー、お前が応援してくれた時、嬉しかったんだよな。馬鹿にしないで受け入れてくれる奴がいるってさぁ」

……時也？

何が言いたいんだ……？ムオは顔を少し上げた。

「ムオ、俺さぁー」

一呼吸おいて、時也は言った。

「俺、あの夢もてて、良かった」

ムオは立ち上がったってドアを見つめていた。ムオ自身が見つめているのは時也だ。

「……」

「良かったよ、あの夢もてて」

良かったの？ 夢中で追いかけてあっけなく壊れた夢が？ シャボン玉のように消えたあの夢のどこが良かったんだ。

「だってさ、あの夢、答がないだろ？」

「……………」

ムオの気持ちを読み取ったように、時也は続けた。

「当たり前的事だけど、教科書も参考書も無いじゃん？ 正解も間違いもないし。だから、答は自分で出さなきゃいけない。大人に頼らずにさ。どうせあんな夢相手にしてくれる大人なんていないよ」

ムオは頷く。

「だから、まあ——間違えるんだ。俺達、何にもわかんねえから。でもそれでいいんだ。間違って間違って……そうして答を見つけていく。俺達が持った夢はもともと間違ってたかもしれない。それでもいいんだ。こうやって『間違っただけ』って知る事ができたから」

いいのか、間違えて。じゃあ今まで僕に完璧を求めてきた母さんはなんだったんだ。

「ムオ、お前縛られてるよ」

ドキッとした。テレパスかお前は……時也は続ける。

「俺達の事を思っ言ってくれる大人の言葉は、俺達の味方ばかりじゃない。むしろ敵なんだ、すげえ強い敵なんだ。夢を持って言うわりにはとにかく反対する。お前もそうだったんだろ？」

そうだよ、僕には夢を持つ隙間さえ与えられなかったけど。



「でもさ、それって、本当は俺達がいけないのかもしれない」

その言葉でムオの動きが止まった。——何？

今まで縛られてきたのは僕の方だ——僕の何がいけないんだ。僕は期待通りに生きてきた。

「俺達の気持ち……ちゃんと届いてなかったのかもかもしれない。届いてたらきっと——親は答えてくれてたのかもしれないって。俺さっき気付いた」

「……」

……この子……。木下は思った。近づいてきてるのかもしれない。上手くは言えてないけれど。

「本気になってぶつかるといってもいいんじゃないかって。いつまでも親の言う事聞いてないでさ」

「……」

「……………」

時也の言葉はそれ以上続かなかった。時也？

——ごめん時也……もっと話して。

ムオはヘッドフォンを外していた。

この長い沈黙のおかげで、ムオには自分で考える時間が与えられた。

——僕にもできたのかな、夢を持つ事が。高校に入ってやっと逃げ出せたと思っていたのにそんな事はなかった。母さんは答えてくれたのかな……。ふと、男性の顔が浮かんだ。懐かしい顔だった。

——父さん……。

『子供の夢は大人が入り込んでいい場所じゃない』

父さん、父さんは応援してくれる？ 答えてくれる？

ムオがそんな事を考えている頃だった。

「——坂口君」

聞きなれない声だった。声の高さで女性だとわかったが、全くわからない。

「私、木下です。保健室の」

「え……」

思わず声が漏れた。なんで木下先生が。時也しかいないと思っていた。木下は続けた。

「あのね、ここに来る前に君のご実家のほうに電話したの。本当は君にかけるつもりだったんだけどご実家のほうに繋がっちゃって」

学校に出している電話番号は実家のものなので当然だ。

「話したらお母さん、泣いてしまって……自分のせいだって」

「え……」

「やっとお父さんの気持ちがあわかったって。あ、坂口君のお父さんね」

「何……」

木下は言った。

「いい名前だね、ムオって」

「あ……」

ムオ。つけたのは父だと聞いていた。

『『夢に生きる』、って書くんだもんね』

そうだ、父さん——父さんは。

「夢生、俺達、帰るな」

階段を下りていく足音だけが、最後に聞こえた。



「もういいの？」

「はい、大丈夫です」

「そっか、ちょっと寂しいなー」

「女子が来るじゃないですか。暇つぶしに」

「はいはい、どーせ暇つぶしの場所ですよー」

体操着を着た夢生はグラウンドに続く保健室のドアを開けた。

そして、笑って、

「吹っ切れたんです、全部——アイツがなくても怖くないなって」

「アイツ？」

木下は首を傾げ、少しして理解したのかボンと手を打った。

「あんなのに頼っちゃ駄目だよ、自分で乗り越えなさい」

「はいはい」

「はいは一回！」

「はーい」

なんだ、あんなに明るい子なんだ。

駆けて出て行った夢生の上に広がるのは真っ青な空だった。

その中を鳥が舞っている。夢生は空を仰いだ。ああ——僕は。

あの翼の下で、これからも迷って。

そうして、強くなればいいんだ。